



5月23日、高嶺中学校の3年生は沖縄戦の実態を肌で感じ、平和への関心を高めるため、校区内にある慰霊碑や塔めぐりながら、周辺のゴミ拾いボランティアを実施しました。生徒たちは碑や塔の前に、戦争の犠牲者となった人々へ鎮魂と恒久平和を祈り、静かに手を合わせていました。

次世代はどのように考えるのか

ここからは、5人の生徒たちが戦争に対して抱いた思いや、それぞれが考える平和のためにできることを紹介します。



城間 徠志



小学校の頃に慰霊碑や慰霊の塔へ行ったときと比べて、より興味がわいた。戦争が今後起きないように、私が大きくなって次の代に伝えるときには、戦跡へ連れていき、戦争の悲惨さや平和について興味を持ってもらえるようにしたい。

私たちが平和に暮らしているので、実際に戦争があったのかなと思っ
たし、戦争についてもっと考えることが必要だと慰霊碑や慰霊の塔に行
って思った。これからは、戦争の歴史を学ぶだけではなく、戦争経験
者から話をたくさん聞いて、後輩たちに語り継ぎたい。



大城 蓮

戦没者を祀る場所があるのは、本当に戦争があったことを証明す
るもので、目の前にあることで、よりリアルに感じた。私たちは戦争
経験者と同じように話ができないので、動画や文章で残して、それ
を見せることで平和への思いをつないでいきたい。

城間 大作



慰霊碑や慰霊の塔のごみ拾いして思ったことは、ごみが少な
くて、みんな慰霊の日が近いことを意識しているのかなと思った。慰
霊碑を残すことが、次の代が平和を考えるときに必要だと思うので、
これからも大事にしていきたい。



新屋 清正

たくさんの慰霊碑や慰霊の塔があって、激戦地だったと強く感じ
た。慰霊碑では、天国で幸せになってほしいという気持ちで手
を合わせた。戦争はだめなことだと思うし、次の代にもその気持ち
を持ってほしいので、戦跡に行っているいろいろ考えてほしい。

稲留 岬輝



白梅の塔

沖縄戦で戦没した県立第二高等女学校の稲福全栄校
長他、職員、生徒、同窓生149名を祀る。

沖縄戦では、二高女は生徒46名が3月24日、軍に動
員された。生徒たちは、現八重瀬町富盛にあった第二
十四師団第一野戦病院に配属され、負傷への看護にあ
った。戦局が急迫すると、新城分院(現八重瀬町新城)、
東風平分院(同町東風平)に移動、看護活動を続けたが、
6月4日、解散命令を受け、弾雨の中で死の彷徨を続けた。

部隊の一部は、解散後、国吉の壕に拠って看護活動に専念したが、多くが犠牲となった。
「白梅」は、白梅をデザインした校章にちなんでいる。



栄里の塔

糸満市真栄里部落一帯で戦没した第二十四
師団歩兵第二十二連隊の佐藤少尉ほか将兵、
住民12,000余名を祀る。真栄里部落一帯は、
6月中旬、強力な火器で押し寄せる米軍に対し
て住民も交えて戦闘が繰り広げられたという。

戦後、真栄里部落住民が周辺に散在していた

遺骨を集め、同塔を建てて納骨して祀った。

この場所は、米上陸軍の主力部隊である米第十軍の司令官、サイモン・Bバックナー
中将の戦死した地でもある。

戦争の記憶を風化させないため、本コーナーでは戦争経験者による証言など
をお伝えしていますが、16回目の今回は、高嶺地区の慰霊の塔を紹介すると
もに、高嶺中学校生徒の平和に対する考えをお伝えします。
戦争経験者が少なくなる中、慰霊の日を前に何を思い、沖縄戦の記憶を引き
継ぐために何が必要か、それぞれの学生が自身の考えを教えてください。